

[シンポジウム4]

長谷川泰と北里柴三郎との接点、
特に伝染病研究所の設立において

檀原 宏文

北里大学名誉教授/学校法人北里研究所北里柴三郎記念室客員研究員

長谷川泰(1842-1912)と北里柴三郎(1853-1931)には4つの接点があった。1. 伝染病研究所設立、2. 医薬分業、3. ペスト防疫、4. 済生学舎出身者、を介した接点である。本発表では「伝染病研究所設立」を介した二人の接点の意義を考えてみたい。

1892年、コッホのもとで世界の細菌学者に育って帰国した北里柴三郎は国に対して伝染病研究所の必要性を説いた。長與専齋(1838-1902、内務省衛生局長)は国の施策には時間がかかることを福澤諭吉(1835-1901、慶應義塾創立者)に説明して援助を求めた。福澤諭吉はこれに応じて自分の所有地に研究所を建て、森村市左衛門(1839-1919、実業家)には設備と器具の設置を依頼し、日本で最初の伝染病研究所を一ヶ月で完成させた。そしてこの全てを大日本私立衛生会に無償で与えて経営を委ねたのである。

しかし、建坪十余坪、上下6室の木造研究所は如何にも手狭であった。そこで1893年、長谷川泰(衆議院議員)は新たな研究所を建設するための法案を帝国議会に通過させ、また後藤新平(1857-1929、内務省衛生局長)も「この研究所の事業は総て北里の指揮に任ずべし」との命令書を内務大臣名のもとに下して北里柴三郎を支援した。

さらに1899年、長谷川泰(内務省衛生局長)は伝染病研究所を大日本私立衛生会から内務省に移管して官立機関とした。これらは「他人に嘴を挟まれず、自分が思うように研究をしたい」という北里柴三郎の当初からの強い希望に応えたものであった。

長谷川泰は黎明期にあった日本の伝染病研究所のあるべき像を正しく見据えていた。それは1893年に文部省が帝国議会に提出した「帝国大学医科大学の内科学・佐々木政吉と外科学・宇野朗の下に、細菌学・北里柴三郎を配置する伝染病研究室案」を否決し去ったことに見て取れる。長谷川泰はこの文部省案を「コッホの覆轍を踏む案」だと断固反対したのである。ベルリン大学のコッホがツベルクリンの研究で失敗した最大の原因は大学のように権限が各教授に分散している組織では自分の思うままの研究ができなかったためであると説明し、「北里にはコッホの失敗を繰り返させてはならない」と訴えた。

こうして長谷川泰の要求がかなった研究所で北里柴三郎は望んでいた伝染病学の総合研究を存分に展開した。その結果、ペスト菌(北里柴三郎)や赤痢菌(志賀潔)が発見され、ジフテリア血清(梅野信吉ら)が製造され、全国の衛生技術官を対象とした講習会(浅川範彦)が開催されるなど輝かしい成果があがった。こうして、わが国の伝染病研究所はコッホ研究所、パストゥール研究所と並び称されるまでになったのである。

ところが1914年、長谷川泰の死去から2年、大隈内閣は何の前触れもなく勅令を以て伝染病研究所を文部省に移管した。これは北里柴三郎にとり「理と情」ともに到底納得できない決定であった。しかし、伝染病研究所が創設されて22年、日本の伝染病学は幅広い専門領域に分科するまでに発展し、総合研究から個別研究が必要とされる時代に入っていた。「今の伝染病研究所は、なるほど、もう自分を必要としないまでに成長したのか……」、北里柴三郎はこうも納得し、伝染病研究所長を辞した(窪田静太郎の追憶より、『北里柴三郎傳』、1932年)。そして「北里」の2字を冠せ「伝染病」の3字を削って新たに興した北里研究所はわが国最大の官立研究所になった伝染病研究所と切磋琢磨して日本の近代医学の礎を築いていったのである。